

## 国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」

### 「日本と宗教：一生の追憶」 ヘイヴンズ・ノルマン

#### 第一部 魅力と失望から生まれる理解

そもそもなぜ私が日本に興味を持っているか。これは身勝手なテーマとして恥ずかしいですが、日本に滞在して40年以上のあいだ、人とはじめて会う時、よく聞かれる質問です。その答えを考えるうちに私も不思議に思うようになりました：「なぜ日本に興味を持ったか」と自問自答してきました。ここではその理由をすべて述べる時間がありませんし、時間があっても、忘れたものや無意識の部分もあるでしょうから、ここではもっとも簡単に説明できる理由を述べさせていただきます。

まず、私は高校生であった1966年に偶然のきっかけがあって、数首の日本の和歌や俳句などを知るようになりました（もちろん、英訳のものでありましたが）。短歌や俳句などという非常に短いかたちでありながら、それほどくっきりとしたイメージをここに描く力に、非常に強い感銘を受けました。私は当時ポートランドの郡立図書館でアルバイトをしていましたので、休憩の時間に英訳の「万葉集」などの書籍を探して、読みました。

ちなみに、ポートランドはオレゴン州の地方都市ですが、1959年（私が9歳のころ）、ポートランドと北海道の札幌市は「ポートランド・札幌姉妹都市協会」を設立し、その提携を象徴するように、次年からポートランドに日本庭園を造ることが企画されました。庭園の第一段階は1967年に完成し、公開されました。

‘67年と言えば、私は高校卒業の年でしたが、丁度そのころ、まだ建設中であった日本庭園についての情報を得て、庭園を見に行きました。まだ公開されていませんでしたが、ある場所に入ることができまして、日本の芸術や自然観に対してまた強い印象を受けました。実はその年、私は学校年鑑に載せるクラス役員の写真をとる担当になって、撮影する場所として、先ほど申し上げたポートランドの日本庭園を選びました。残念ながらその写真はもう手元にはありませんが、撮影の場所として好評でした。

正直いいますと、日本文化について、いくつかの短歌や庭園の少数の例以外には、ほとんど何も知りませんでした。すでに頭の中に日本の「理想像」が形成されていきました。たしか、それは「ロマン主義的」な理想像ではありましたが、西洋（少なくとも英国やアメリカ）の文化に余り見えない要素が日本にあると思ひ、新鮮な意外性を感じました。例えばご周知のように伝統的な英語の歌・詩には押韻または「韻を踏む」という手法がありますが、音を繰り返すことにより一つの安定したリズム感や秩序を言葉に与え、次の句を予想して歌を覚えやすくなる助けにもなります。西洋の伝統的な園芸法にもまた、直線性や左右対称が多く、その作り方によって自然界にある規則正し

い秩序を与えます。これらの特徴に対して、日本の文学には押韻があまりありませんし、園芸法にも秩序立った直線性や左右対称はあまり見ません。

当時の若者としてこのような単純な違いを感じ、ある意味でそれらを絶対化して、私の日本理想像のかけがえのない要素となっていました。これ以外にも、「けがれ」や「じゅんすい」、「まこと」と「まごころ」などの概念はある程度分かったつもりでしたが、これらの概念は日本にどのように日常的に実現されるか、まったく分かりませんでした。

そのために1975年に私ははじめて日本に滞在したとき、かなりのショックと失望も感じたことがありました。簡単な例を少しだけ述べますが、初めて京都に旅したときに、京都の南部にある醍醐寺を訪れ、山の上にある上醍醐まで歩きました。しかし、道をどこ見ても、ゴミだらけでした。何かの祭があったか分かりませんが、そうした「聖なる」（と思った）空間を汚すマナーの悪さは納得できませんでした。そのような経験から思うようになりましたが、日本文化における自然観や清潔観は「うちとそと」という原理により規定される側面があるらしいと思うようになりました。自分の家など「うち」の空間では、清潔を大事にまもりますけれども、「そと」という公共空間は自分の責任ではないので汚してもそれほど後ろめたい気持ちがしないのであろうと思いました。もちろんそれは過度に単純化した判断ではありましたが、当時はそのような気持ちが強かったのです。

おなじ旅の別の場所にも同じような失望感を経験しました。京都北部にある龍安寺は有名な臨済宗の禅寺ですが、アメリカの大学で禅仏教の授業を受けたとき、英文教科書では龍安寺の枯山水庭園が「さとり」の具体的な表現として賞賛されたので是非とも見たいと思いました。しかし、実際に見に行った日、庭園の前で座って静かに鑑賞しようとしたら、突然2-3箇所に設置されたラウド・スピーカーから録音された声が大音量で鳴り響き、庭園の意味について説明がはじまりました。いうまでもなく、授業で受けた禅の理想像とその龍安寺の日常的な現実とのあいだには大きなギャップがあり、長い間気持ちを整理できませんでしたが、今考えると、そのような日常性のなかにこそ禅があるかも知れないと思います。

最後の例ですが、1981年から放送されたアニメ番組で「Dr.スランプ アラレちゃん」です。可愛い女の子「アラレちゃん」は主役でしたが、アメリカ人としてちょっとびっくりするモチーフが番組にありました。それはアラレちゃんの「ウンチ」に対する興味でした。当時のアメリカのテレビ番組——特に子供向けのもの——にはそのような「排泄物」に対する魅了はアニメのテーマとして相応しくないとして多分ありえなかったと思います。もちろん、アラレちゃんは実はロボットだと分かれば、彼女の意外な関心は納得できるでしょう。しかし、それよりも私が不思議に思ったのは、アラレちゃんは日本文化で大事にされる（と私が単純に思っていた）「けがれ」や「せいけつ」の価値観と矛盾しているのではないかと一瞬思いました。40年後の今考えてみますと、文化の価値観は必ずしも一貫性のある論理的なものではありませんし、不合理であるのは、日本文化の「アラレちゃん」ではなく、合理的な科学の国でありながら自然の生理現象をテレビから追放するアメリカかもしれませぬ。

## 第二部 宗教と私

これから発表の後半に入りますが、その前に、少しだけ付け加えたいことがあります。

先の前半では、日本について「魅了」、「失望」、と「理解」というキーワードを使用しましたが、その「理解」の内容はどのようなものであったかあまり言いませんでした。ひとつの受けた理解は、私の日本に対する最初の理想像は、必ずしも適切な前提に基づいたものではないということです。その結果、その後の失望も必ずしも適切な結論から導かれていなかったものではなかったかも知れません。例えば、私が京都の龍安寺で経験したことは、宗教が社会に実にどのように働くかについての正確な知識に基づいたものではなく、禅仏教の理想的なカリカチュアまたは「戯画」から来たので、その結果として感じた失望も当たり前でした。アラレちゃんの場合も然り。私が抱いていた日本や神道の「穢れ」観念は必ずしも日本人の実際の生活で経験する概念と同じではありません。だから、私が感じたショックは、日本人が穢れに対して「とるべき」態度がアラレちゃんの場合に表れていなかったことの結果でしょう。だから、私はこのような経験から受けた「理解」は日本についての理解もありましたが、たぶんもっと大事であるのは自分自身についての理解でありました。つまり、これらの経験のおかげで、私の根拠のない思い込みが晒されました。だから、神道や日本文化一般には、穢れや清め、禊、祓などの大切な概念は確か存在しますが、日常生活と齋戒とでは、同じ神経が働かない場合もあり、かえって生物体の生理や肉体の機能に対して、おおらかな態度さえ、見えることがあります。特別な目的の禊祓もあれば、田植えなどをめぐる「泥んこ祭り」も少なくありません。

このようなおおらかな態度はキリスト教の欧米には比較的少ないのではないかと思います。ゴッドの純粹な精神性（靈性）に対して、物質と肉体の世界は弱くて本質的に下位の価値しかありません。初期キリスト教がギリシャ哲学から受けた影響は大きかったとよく言われます。そのなか、プラトンによると、人間は「墮落した天使」であり、肉体という殻に捉えられている魂であると言います。その低い評価を反映するように、キリスト教も、肉体そのものはゴッドに対する「原罪」の元であるといわれます。

少し脱線してしまいましたが、今まで個人的な経験を長々述べてきた理由は、それが特別に面白いとか深い意味があるとかというわけではありません。かえって、このような経験パターンは多分外国にはじめて行って滞在する外国人には典型的なものではないかと思えます。ですから、大学で授業を担当していたころ、このような経験談を授業でよく使いました。特に K-STEP という國學院の短期留学プログラムで長年教えていましたが、外国人学生には「このような思い込みや誤解と失望に注意せよ」という意味で、頻繁にレクチャーに取り入れました。私の経験では、インドや東アジアの宗教に興味をもつ欧米学生の多くは、禅仏教に関心を示す傾向が強いです。しかし、前に申し上げたように、禅の「特異性」（例えば謎めいた公案や問答）が個人としての出家の悟りに必須の役割を果たすと認めても、一般的なお寺の檀家の日常生活とどのような意味があるかはなかなか見えません。それを紹介するように、自分が撮った写真やビデオも使いますし、直接神社や

お寺などに校外学習として案内したこともありました。この後、時間が許す限り、それについてもちょっと述べたいですが、まず、ここまで申し上げた話を考えてみると、私の関心は、日本の政治や経済、あるいは科学技術ではなく、そのほとんどは日本の宗教または基礎文化的価値についての関心でありました。冒頭では、私は最初日本に興味をもった理由には偶然の割合が高いと指摘しましたが、日本の宗教あるいは宗教そのものに興味をもった理由は偶然ではありません。

私を知っている人であればすでにご存知と思いますが、私はキリスト教の保守的な教団に生まれ育ったのです。それも原理主義的な集まりで、聖書を厳密に文字通りに解釈することが基礎的なスタンスでありました。そのため、他の教会・教派との交流は乏しいし、特に子供のころ、教会以外の友達はほとんどいませんでした。毎週3回の定期集會に家族全員で参列しましたし、不定期の特別集會にも参加しました。高校を出るころ、宣教師か牧師になることも検討していました。端的に言うと、教会は私たちのすべてでした。

ですから、20代になって、少しずつ教会から離脱しようとしたら、大変なストレスを経験しました。教会と家族が不可分の関係にありましたので、教会を拒否することは、即家族を拒否すると同じで行為です。ちなみに、この原則は私がメンバーであった教会だけではなく、ほとんどの教派に当てはまると思います。保守的であればある程その傾向が強いでしょう。最近ネットで見ますと、教会を離脱する人々のためのサポートグループ（互助会）が多くあるようです。しかし、個人のソーシャルメディアであろうが、互助会のウェブサイトであろうが、よく聞く文句は「why I left the OO church」（なぜ私はOO教会を辞めたか）という形式のものが多くあります。いうまでもなく、そのような経験談の目的は単なる「通知」ではありません。自分がとった行動が正しい、妥当であるという自己正当化の表現であります。長くメンバーであった教会を辞めることは心に大きな空白を残すことがあります。そうした穴を埋めるための第一歩は、辞めた理由の詳細を論理的に明確に述べることでしょう。私の場合、まだインターネットやソーシャルメディアはありませんでしたが、数通の手紙や自分の日記にできるだけ詳しくその事実を書きとめました。その第一歩の次に、宗教の力をより深く理解するために、大学院で宗教学を学ぶことにしました。すでに45年が経ちました現在は「穴埋め」作業はもう必要ではありませんが、宗教のあらゆる形とその力に対しては、まだ興味津々です。

### 第三部 日本と宗教を写真に

（動画本編をご参照ください。）

## まとめと挨拶

ここまで参りましたが、今日の発表は個人的な経験にもとづいたかなり軽い内容で申し訳ないです。反面、はじめて外国にながく滞在する若者と共通する経験でもあるので、その事実を認め、どのように乗り越えるかという話は意味があるかも知れません。

内閣府が数年前から進めてきた「クール・ジャパン」戦略のため、日本の「カッコいい文化」などが世界に披露されてきましたが、「クール・ジャパン」よりはるか前から、日本文化に魅了され、それを理想化した外国人はいました。明治時代の小泉八雲は完全な“lotus eater”（夢想家）ではなかったかも知れませんが、その時代にそうした人は確かにいました。特に戦後の1950代に禅仏教や日本文化に魅了された人のうち、いわゆるビート世代（ビートジェネレーション）のGary Snyder（ゲアリー・スナイダー）などの作家は日本の禅寺で修行をしています。’60-’70の時代には、Alan Watts（アラン・ワッツ）や鈴木大拙の仏教入門書は非常に人気があるもので、日本文化や禅などの理想化に影響を及ぼしました。この発表では、わたしはその影響を受けた一人だと述べました。発表のパート2では、私は宗教との関係を簡単に説明しました。特に熱心な信者の原理主義教会に育ったものは、教会を辞めることはほとんど家族を辞めるのと同じ精神的インパクトがあると説明しましたが、そのころの穴を埋め、理解するために大学院で宗教学を研究することに決めたと述べました。

最後にこの大会のテーマである「日本の宗教文化を撮る」に対して、自分のながい「写真歴」から少しだけ、これまでの教育に使ってきた写真を紹介しました。

二年ほど前に國學院大學を定年退職して以来、一度も電車に乗って渋谷に出かけていません。もちろんその理由は、新型コロナウイルスの感染症パンデミックが勃発したことによるものです。これから感染が下火になって、心身の状態が許す限り、また都会にでかけ、皆さんと直接会う機会を楽しみにしています。

今日の発表の機会を与えてくださった日本文化研究所の平藤喜久子所長と吉永博彰助教に心より御礼申し上げます。特に吉永さんは、ご無理を聞き入れて各段階において丁寧にサポートしてくださったことを、誠に感謝しています。

ご清聴ありがとうございました。